

# 農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

「栗と北斎と花の町」小布施を舞台に、女性農業者6人が行う  
「カントリーウォーク」による都市と農村の交流と農村の魅力再発見

かぜのかい  
受賞者 **風の会**  
ながのげんかみたかいぐんおぶせまち  
(長野県上高井郡小布施町)

## ■ 地域の沿革と概要

小布施町は、長野県北部の長野盆地に位置し、周囲を雁田山と千曲川など3つの川に囲まれた自然豊かで果樹栽培が盛んな農村地帯である。総面積は19km<sup>2</sup>、町役場を中心に半径2kmの円にほとんどの集落が入る、県で最も小さな自治体である。総人口は約12,000人、住民同士が互いに顔を知りあえるような環境にあり、美しい自然環境に恵まれた人間味豊かな地域社会が形成されている。

また、先人の残した文化遺産を継承・発展させる中で、「栗と北斎と花の町」として全国的な知名度があり、人口の100倍にあたる年間120万人の人々が訪れる町となっている。

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

## ■ むらづくりの概要

### 1. 地区の特色

小布施町は、南部を流れる酸性度の高い松川の扇状地にあることから、古くから稲作よりもその時代に適した商品作物の栽培が盛んであった。室町時代に丹波から伝わったとされる「くり」、昭和30年代に信州一の栽培面積を誇った「りんご」など、農業者は商品作物への転換や付加価値農業の創出に敏感でありチャレンジ精神に富んでいる。

町では、町の知名度や地域ブランドを活かし、付加価値が高く特色のある農産物の生産・販売につなげ、他産地との差別化を図る「小布施ブランド戦略」を小布施町振興公社との連携により展開している。公社が取り扱う「良

第1表 地区の概要

事 項	内 容	
地区の規模	集落	
地区の性格	機能的な集団等	
農 家 率 (内訳)	25.3%	
専兼別農家数 (内訳)	総世帯数	3,511戸
	総農家数	887戸
	専業農家	189戸
農用地の状況 (内訳)	1種兼業農家	164戸
	2種兼業農家	325戸
	総土地面積	1,907ha
	耕地面積	813ha
	田	160ha
	畑	653ha
耕地率	42.6%	
農家一戸当たり耕地面積	0.9ha	

い品」を差別化するため、C I戦略として「小布施屋」という商標を登録した。また、町が日本で初めて栽培した原産地イギリスの料理用青りんご「ブルムリー」や、サワーチェリーの「チェリーキッス」を老舗フルーツパーラーとのコラボレーションで売り出すなど、商品のブランド化を推進している。

しかし、「栗と北斎と花の町」として知名度が上がる一方で、町の基幹産業である農業は、農家の高齢化や遊休農地の増加などが課題となっており、住民の新たな知恵と工夫による取組が求められている。

## 2. むらづくりの基本的特徴

### (1) むらづくりの動機、背景

#### ア 「風の会」の結成

平成8年、町北部の農村地域の女性6名により「風の会」は結成された。結成の発端は、前年に女性たちが寸劇「農業は強く、優しく、面白く」を上演したことだった。この寸劇は、農村や女性の置かれた現状を認識し、仲間と共に明るく活気のある地域を築くことが主題であった。



写真1 風の会メンバー

風の会の結成は、寸劇で表現した活動を自ら実践することで、農村の課題に挑戦し、地域を活性化させたい、女性の視点から農村に新しい「風」を起こしたい、との思いによるものであった。

#### イ 農村の魅力を伝える「カントリーウォーク」との出会い

風の会は、信州大学農学部桂教授（当時）から、英国のカントリーウォークの話聞く機会を得た。田舎歩きを通じて自然、風景、文化、人、食、そこにある様々なものを五感で感じ、楽しみ、農村・農業の良さを再発見し、理解を深めるというカントリーウォークの趣旨にメンバーは共感した。町の農村部には一般的に知られていない風光明媚な景色が多数あり、古くから伝わる農村文化が残されている。風の会は、農村の素晴らしさや、農業・農村の現状を多くの人に伝えたいという思いから、カントリーウォークに挑戦することとした。

#### ウ カントリーウォークの開催

平成13年4月29日、町がりんごやももの花で染まる季節に、第1回カントリーウォークを「春うららら・フラワーウォーキングin小布施」（以下「春うららら」という。）と題し、りんご・ももの摘花、アスパラガス・野沢菜等の収



写真2 カントリーウォークの様子

穫体験とウォーキングを組み合わせで開催し、約100名の参加者が集まった。

参加者からは、「こんなに手をかけてももやりんごを育てていることを聞き感動した。これからは大切に食べたい」「農村のおもてなしの原点を見た」など賞賛の声が寄せられた。初めての試みではあったが、風の会にとっては自信と喜びを得るとともに、行動することの大切さを学ぶ機会となった。

## エ カントリーウォークの活動経過

平成14年、第2回春うららは、りんごの花摘み体験に加えて農村部の伝統文化に触れてもらおうと、地域の祭りに合わせて開催した。

また、第3回は、春に花摘みをしたりんごの成長を見てもらおうと、「秋きらり！フルーツSaturday」（以下「秋きらり」という。）と題し、りんごの収穫体験とカントリーウォークを組み合わせ、同年10月に開催した。



写真3 りんご収穫体験

以後は春と秋1回ずつの開催が定着し、これまで23回開催されている。当初は参加者集めに苦労したが、現在では参加者が増え、定員を100名として開催している。

毎回テーマやコースを変えるなど創意工夫し、農村女性ならではの心遣いともてなし、メンバーの飾らない人柄と笑顔に参加者の満足度も高く、リピーターが半数以上を占めている。

風の会では、「小布施においでいただき、農村の魅力を伝えることこそがカントリーウォークの目的」と考えている。

## オ カントリーウォークの発展

カントリーウォークは、回を重ねるごとに内容が充実し、次のような取組に発展している。

### ① 農村の食文化の継承、食育の推進

カントリーウォークの昼食は、メンバーが栽培した野菜をふんだんに使って手作りするとともに、農村の食文化の魅力を紹介するため、花摘みした「りんごの花の天ぷら」や、「タンポポやセリのおひたし」、メンバーが栽培した大豆を用いた「手作り味噌」なども提供している。



写真4 農村料理のバイキング



また、農家の視点から農産物を通した「いのち」の伝え方があると考え、「じゃがいもの一生」の紙芝居を作るなど、いのちの素晴らしさを多くの人に伝える工夫をしている。

## ② 農業・農村の魅力の活用

平成19年に、風の会のオリジナルソング「大地の贈り物」（作詞：風の会、作曲：岡田京子氏）を作成し参加者に披露したほか、平成22年にはカントリーウォークがきっかけで結婚したカップルの花嫁行列と披露宴を茅野市三友会（諏訪大社の氏子の若手グループ）による木遣を交えて行ったり、平成24年にはOKA学園（デザイナー専門学校）の学生と協力して満開の果樹畑でファッションショーを開催するなど、農業・農村の魅力を活用し楽しむ新たな方法の提案にまで広がりを見せている。



写真5 満開のプラム園でのファッションショー

## (2) むらづくりの推進体制

### ア 「風の会」の組織体制

風の会は、会長の内山育子氏を中心に、兼業農家の小林つや子氏を事務局に据え、町北部の農村女性4名を会員とした6名体制である。

長野県では地域農業の振興、むらづくり活動等に女性の立場から取り組み、地域の実践的リーダーとして活動することを狙いに、知事が農業経営と農家生活の向上に意欲的な女性農業者を「農村生活マイスター」として認定している。風の会のメンバーは、ほぼ全員がこの認定を受けており、それぞれが得意分野を活かしながら、カントリーウォークのほか、学校給食への食材提供、町が行う都市農村交流への協力等、地域の活性化に貢献する活動を行っている。

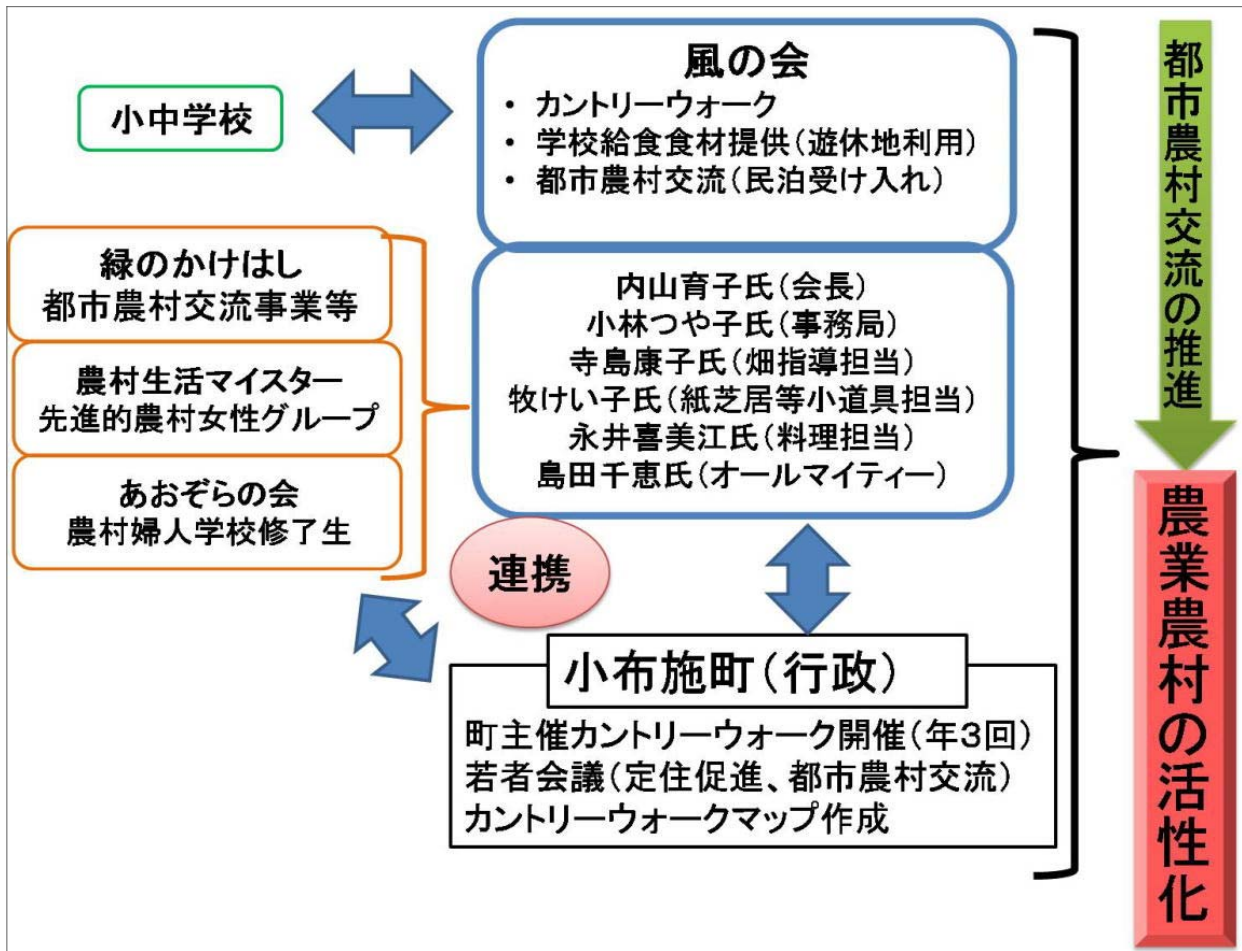
### イ 他団体及び行政との連携

カントリーウォークの開催に当たっては町が後援し、役場職員が当日の駐車場係や引率補助などに協力している。一方、町主催のウォーキングの際には、風の会のメンバーが協力しており、こうした関係性は、町が目指している住民との「協働」の姿そのものである。

風の会の結成から6年後、北部農村地域の男性を中心に結成された「緑のかけ橋おぶせ」とは、お互いに協力しながら活動を展開している。

また、風の会は、農村婦人学校（主催：農業改良普及センター）修了生による「あおぞらの会」や農村生活マイスターの女性たちとの連携により、カントリーウォーク昼食会場での加工品の販売、「婚活パーティー」と合わせたカントリーウォークなどを実施している。

第2図 むらづくり推進体制図



## ■ むらづくりの特色と優秀性

### 1. むらづくりの性格

風の会のこれまでの活動は、町と住民との協働気運の醸成や、様々な交流の輪の広がりなど、小布施町が目指すまちづくりに寄与している。

平成16年、小布施町は「合併せず自立(自律)した町をつくる」ことを選択したことから、以前にも増してまちづくりへの住民の理解と参加が不可欠となった。

平成17年に就任した市村良三町長は、「観光とはそこに住む人の生活文化を肌で感じ、触れ合い、交流によって培われ育まれる産業」と位置付け、町への来訪者が口にする「懐かしい」「ほっとする」などの言葉から、果樹を中心とした美しいほ場とその中で生活する農家の姿こそ、日本の農村が守るべき姿であり、これからの小布施町づくりの基本であるとした。平成23年度からの「第五次小布施町総合計画」では「暮らしにあふれる笑顔 いいひと いいまち わくわく小布施 ～自律と協働、そして交流～」を将来像に掲げ、農業者、商工業者、観光関係者、さらには全ての住民が一体となったまちづくりを進めるべく施策を展開している。

## 2. 農業生産面における特徴

### (1) 農業生産、流通面の取組(贈答販売先の開拓)

風の会メンバーの経営規模は、りんご350a、ぶどう220a、もも70a、その他(水田、野菜、花き等)115a程度であり、現在、風の会として「大地の贈り物ギフト」や「風の会夏ギフト」、「冬ギフト」と称して果樹の贈答販売を行っている。「大地の贈り物ギフト」は、年間を通して一番おいしい時においしい物を届けることにこだわった商品で、もも、ぶどう、りんご、りんごジュース等を販売している。今後は、加工品の開発、ギフトの内容充実のほか、日曜日限定の農家カフェ「One Day カフェ」の開店などに取り組む意向である。

また、メンバー個人の取組として、生産した農産物を「小布施屋」へ販売している他、町が進めている「小布施 旬のふらっと農園<縁>」(観光客等が気軽に立ち寄って、農家と交流することを目的とし、農園を解放している農家の集まり)に参加するなど、個々の農業生産においても小布施ブランドの発展に貢献している。

### (2) 遊休農地の有効利用

風の会では、平成20年から遊休農地を利用した農業生産活動を開始した。たまねぎ、じゃがいも、大豆などを生産し、町立小中学校の給食の食材として提供している。耕作面積は5aからスタートしたが徐々に拡大し、現在は20a程度となっている。

### (3) 農業者意識の向上

風の会で試行錯誤しながら活動に取り組む中で、メンバー個々が自立し、それぞれのスタイルで本業の農業に取り組む心構えが醸成されてきた。与えられた仕事をする農業から、家族経営協定、養子縁組等を経て、一人の経営者として自立し、自分で考え行動する農業へと意識が変化した。

風の会の活動は、メンバーの人間性を豊かにし、お互いを認め合い高め合う良い機会となっている。

## 3. 生活・環境整備面における特徴

### (1) 地域への波及

風の会の活動は、小布施町のまちづくりの方針に大きな影響を与えている。

平成18年、町は「第四次小布施町総合計画後期基本計画」の重点施策の一つに健康ウォーキングの普及を掲げ、町内を周遊するウォーキングコースを整備し、町の景観そのものが観光資源となるような環境づくりを始めた。平成20年度には、秋1回の開催だった町主催のウォーキングをカントリーウォークと改称し、年3回に増やして開催することとし、現在では風の会主催と合わせると年5回開催されている。平成22年度には、健康のためのウォーキング普及に向けて町が行ったドイツ視察に風の会メンバーも

参加し、ドイツのカントリーウォークと健康づくりの考え方を学び、パワーウォーキングをカントリーウォークに取り入れるきっかけとした。

また、町が平成21年に作成した、農村地域の紹介のための「カントリーマップ」制作に協力しており、完成したマップは、どこことなく懐かしいタッチで描かれ、手にすると農村部を歩きたくなるような素晴らしい出来栄えになった。

## (2) 農村の慣習や文化の継承

風の会は、地域に伝わる慣習や伝統行事の由来、農業・農村との関わり等を地元の研究者から学び、手作りの紙芝居にして上演している。北部押羽地区において、住民が三地蔵に毎朝御膳を供える慣習の由来などを伝える数種類の紙芝居は、カントリーウォーク参加者はもちろん、地域の人たちからも「慣習としてやっていたが、なぜ行っていたのかその意味が分かった」と好評を得ている。

また、カントリーウォークに伝統芸能（神楽、獅子舞）の鑑賞を加えた折には、参加者から「懐かしい」「珍しい」という声が聞かれた。伝統芸能の保存会の人たちにとっても、地域以外の人に伝統芸能を見てもらう良い機会になり、地域の伝統文化継承の大切さを再認識する場となった。

## (3) 生活・環境面の取組

会では、町が平成17年度に「協働のまちづくり懇話会」の委員を公募した折には全員で参加し、将来の町のあり方について話し合いを行った。また、町が取り組んでいる「花のまちづくり」の趣旨に賛同し、平成17年度から継続的に道路や公的な場所における花壇づくりを行っている。

## (4) 都市住民・若者との交流から定住人口の増へ

人口減少にいかんにか歯止めをかけるかは、小布施町においても課題となっており、町では様々な団体と協働でイベントや交流事業を展開し、交流人口の増加に努め、それらを定住につなげることとしている。こうした町の取組に、風の会の活動は大きく寄与している。

風の会は、平成21年に町で開催された「第61回日米学生会議」に協力しミニカントリーウォークを実施し、多くの若者が小布施の魅力堪能した。また、平成24年に全国の35歳以下の若者約200名の参加により開催された「小布施若者会議」の際には、風の会のメンバー宅でも民泊受入れを行った。これがきっかけとなり、平成24年秋きらりに関東圏の若者が参加し、更に平成25年冬にはその若者たちが、関東在住者を対象に「小布施町の暮らし体験ツアー」を企画するなど、新たな交流が生まれている。

このように、全国各地から若者が集い、小布施の魅力にふれ、仲間に紹介し、また町を訪れるという「若者交流スパイラル」が展開し始めている。

風の会の活動はまさにこれに寄与するものであり、人と人とのつながりが新たな交流へと発展し、北部地域へ、さらには町全体に人を呼び込んでいる。